

【第4分科会】

高齢者体験を通して考える

八潮市立大原中学校
教諭 奥住 壽揮

1 はじめに

(1) 大原中学校の紹介

開校54年になる本校は、令和7年4月1日現在で1年生194名、2年生200名、3年生201名、合計595名が在籍している。

また、「心豊かに生き生きと学ぶ生徒」－光る汗、輝く笑顔－を学校教育目標とし、目指す学校像を「響き合う学校＝通いたくなる学校・通わせたい学校・勤めたい学校・支えたい学校」として運営している。



【校章】



【学校全体写真】

(2) 現状と課題

我が国は本格的な高齢社会を迎え、人口の4人に1人が65歳以上の高齢者となっており、こうした状況の中、高齢者への身体的、心理的虐待や介護放棄、財政面での権利侵害等が懸念されている。さらに、高齢者に対する悪質な訪問販売、財産奪取等の犯罪や権利侵害が増加している。

また、高齢者を年齢などにより一律に捉えるといった誤った理解が高齢者に対する偏見や差別を生むことや、年齢制限により、高齢者の働く場が十分に確保されていないことなどが指摘されている。高齢者が、住み慣れた地域で、生きがいと喜びをもち、安心して生涯を送ることができる社会を構築することが課題となっている。

(3) 学習指導要領における高齢者についての学習

学習指導要領（平成29年告示）では、内容A「家族・家庭生活」の(3)「家族・家庭や地域との関わり」に、高齢者など地域の人々と協働することに関する内容が新設され

ている。これまで、高齢者に関する内容は、高等学校の家庭科で扱っていたが、急速な少子高齢化社会の進展に対応して、中学校でも取り扱うこととなった。中学校学習指導要領解説技術・家庭編には、「高齢者の身体の特徴についても触れること」「高齢者の介護の基礎に関する体験的な活動ができるよう留意すること」とあり、この学習が高等学校家庭科における高齢者の介護に関する学習に繋がることが明記されている。

2 授業実践

「高齢者の身体の特徴を知り、関わり方を考えよう」を目標に据え、体験活動を交えた授業を展開した。

(1) 現状の高齢化社会について

授業の導入で、少子高齢化社会について確認し、高齢者との関わりが身近なことであると理解を促す。

(2) 高齢者の身体的特徴

穴埋め問題にして、以下の事を確認する。

耳「特に高い音が聞こえにくくなる。」

呼吸「肺活量の低下により息切れしやすくなる。」

皮膚「感覚が鈍くなり、指先が動かしにくくなる。」

泌尿器「トイレが近くなる」

目「視力が低下したり、視野が狭くなったりする」

心臓「動悸が起こりやすい」

筋力「足腰が弱くなる」

関節「かたくなり、動きが不自由になる」

骨「骨折しやすくなる」

(3) 高齢者との関わり方

立ち上がりの介助や、歩行の介助など、具体的な介助の方法を学ぶ。「すべて相手の気持ちになって行うことが大事である」ということを伝えた。また、声のかけ方についても以下のように指導した。

○声のかけ方

①目線を同じ高さにして、適度な距離で親しみを込めて見る。

②積極的に、明るい声で、ゆっくりと、聞こえやすい大きさと声で声をかける。



【授業プリント】

- ③優しく声をかけながら、人によっては手や背中に掌で触れることで、声や気持ちが届きやすい。

(4) 高齢者体験

高齢者体験キットを身にまとい、3人1組になって体験をする。決められた場所にあるスタンプを押し、教室に帰ってくる体験である。高齢者体験キットは、生徒にとっては一つ一つが重く、不自由とを感じるものである。特に耳がほとんど聞こえないので、大きな声でコミュニケーションを取っていた。また、高齢者体験キットを外したときに「ふう」とため息をもらす生徒が多く、「高齢者はそのつらさと毎日向き合っている」ということを伝えた。



【高齢者体験キット】



【キット装着正面】



【キット装着側面】



【高齢者体験キット 耳】

3 成果と課題

(1) 成果

生徒一人一人が高齢者に関わることで、高齢者になった時のことを考えることができた。

以下が、体験後の生徒の感想である。

○介助される側の気持ち・気付いたこと

- ・自分が思っていたよりもはるかに耳が聞こえづらいのと、体が不自由ということを実感しました。
- ・いつも当たり前前にできていたことが、全然できなくて不便。
- ・介助をしてもらって、とても安心した。
- ・介助をもらうのが申し訳ない。自分でできることはしたい。

○介助する側の気持ち・気付いたこと

- ・結構大きな声を出さないと聞こえないということが分かった。
- ・大変だった。どこまで手を出していいのかわからない。
- ・いろんなことをうまく伝えられなくて難しかった。

○高齢者と関わる時に大切なことは何だろう。どんな配慮が必要だろうか。

- ・高齢者体験をして、あまり声がきこえないということが分かったので、次におばあちゃんやおじいちゃんと会う時はボソボソしゃべらず、ハキハキと大きな声でしゃべろうと思いました。また、優しく接しようと思いました。
- ・今日の授業で耳が聞こえづらくて体が不自由ということが分かったので、この経験を生かして、自分がその立場だったらと考えて、その人のためになる行動をしていきたいです。
- ・聞こえるような声、スピードで話すこと、見えるように目の前で表すことなど、今日体験して大変だったことを高齢者の方に配慮していきたいです。
- ・優しく丁寧に話しかけたり、あまりさわりたくないことが大切だと思いました。率先して手伝ったり、助けたりすると高齢者にとって少しは楽になるのではないかと感じました。

(2) 課題

高齢者体験をし、高齢者の方が日頃感じているつらさを実感したが、本当に困っていることや、してほしいことかどうかは分からない。中には介助を望まない高齢者の方もあると思う。このことから、実際に高齢者の方から話を聞く場を設定したほうがより効果的な学習につながると考えられる。

4 おわりに

今回は技術家庭科での実践を報告したが、高齢者との関わりは他教科でも考えられる。社会の歴史分野で「戦争経験者をお招きしてお話を伺う」、総合的な学習の時間で「地域の高齢者をお招きして伝統文化を教えてください」など、高齢者に関わる体験を増やし、学習を充実させるとともに、生徒たちが高齢者の人権について考える機会を積極的に設けていきたい。

【第4分科会】

『探究活動を通じた人権教育』

埼玉県立不動岡高等学校
教諭 高野 光弘

1 はじめに

本校は、明治19（1886）年に創立された埼玉県内で最も歴史のある高等学校である。「明日の世界を創造する品格のあるリーダーの育成」「科学教育と国際理解教育の拠点校として地域文化への貢献」を教育目標としている。国際理解教育に関していえば、台湾への修学旅行をはじめとし、オーストラリア、フランス、ドイツ、マレーシアへの研修旅行を実施し（希望者）、留学生も積極的に受け入れている。また、グローバルスタディーズプログラムといって、海外の大学生を本校に招き、国際的な社会問題について英語で解決策を話し合うワークショップも実施している。

また3年間を通じた探究活動にも力を入れており、三菱みらい育成財団の助成を受けている。



【教室棟と不動の大階段】

2 3年間を通じた探究活動

1年次では、まずデータ収集やデータの読み取り、文章表現、プレゼンの仕方等、探究に必要なスキルを学んだ後、「SDGs探究」を行う。

「貧困をなくそう」「飢餓をゼロに」等、17の分野からテーマを設定し、4～5名のグループで探究活動を行う。

2年次では、1年次で学んだことを生かし「未来探究」を行う。「異文化理解」「地域課題研究」「理数探究」の3分野からテーマを設定し、4～5名のグループで探究活動を行う。

3年次では、2年次における研究成果を論文に仕上げる。

1, 2年次の探究活動では、学校の代表者を選出し、外部のコンテストにも出場する。

昨年度、「地域課題研究」で「熊谷市の公共交通機関の活性化」について探究活動を行ったグループが、大阪万博で研究成果を発表することとなった。

（三菱みらい育成財団主催「高校生 MIRAI 万博」）
学年集会で壮行会も行った。

探究活動については「Fスタディ部」という分掌がこれを担当している。

3 1年次SDGs探究（昨年度の事例）

17の分野からテーマを設定し、4～5名のグループで探究活動を行ったが、「外国人の人権」に関する探究活動を行った事例を挙げる。

（1）～（4）はテーマ、①は分野、②はテーマに対して誰がどのように困っているか？またその原因は？③は、困っていることに対して自分たちはどのような企画（アクション）をするか？である。

（1）教育現場における留学生・他国出身生徒の受け入れのしかたについて

- ①分野「質の高い教育をみんなに」
- ②イスラム圏など他国出身の生徒が、日本での学校生活において生活文化の大きな違いに困っている。原因は、宗教・価値観への認識不足、コミュニケーション不足にある。
- ③校則に、宗教等に配慮した特別措置を導入する。価値観や文化の違いについての認識を深めるための座談会の実施、ポスターの製作などを行う。

（2）国を超えて繋がろう

- ①分野「人や国の不平等をなくそう」
- ②外国人労働者が日本人とコミュニケーションをとるのに苦労している。原因は、言語・文化の違いと親睦を深め切れていないことである。
- ③イラストやジェスチャーを使い、お互いの文化を知りつつコミュニケーションがとれるゲームを行う。

（3）救おう難民 守ろう生活環境

- ①分野「平和と公正をすべての人に」
- ②ロヒンギャの人々が苦しい難民生活を強いられている。紛争や迫害、社会的自立の困難さが原因である。
- ③ロヒンギャ問題についての啓発活動、UNHCRへの募金などを行う。

（4）差別意識の撤廃

- ①分野「平和と公正をすべての人に」
- ②日本在住の外国人と地域住民がお互いに困っている。互いの文化や生活様式に対する理解不足が原因と考える。
- ③たとえばクルド人の歴史についての講習会等、啓発活動を行う。

SDGs探究の発表会は、まず分野ごとに行われ、そこで分野ごとに代表グループを決定し（1月）、代表グループが学年全体で発表を行った（2月）。

4 2年次未来探究（昨年度の事例）

2年次の未来探究は、「異文化理解」「地域課題研究」「理数探究」の3分野からテーマを設定し、4～5名のグループで探究活動を行った。

「異文化理解」において外国人の人権を扱った探究活動が見られた。以下、テーマと概要を挙げる。

（1）「ベトナム人技能実習生のために」

フィールドワークを通じ、実習生や受け入れ先の生の声を聴き、彼らを手助けするために、日本での生活を解説する動画を作成した。

（2）「君たちは入管について知っているか」

正規の滞在が認められない外国人を収容する施設の実態について、国際基督教大学の大学生、付属の高校生と連携して調査を行った。また、問題の認知度を高めるための取組も行った。

（3）「外国人労働者の言語能力向上プロジェクト」

夏休みにフィールドワークを行い、工場等で働く外国人労働者の日本語能力向上という課題に取り組むことになった。日本語教室に通ったり、彼らのための日本語マニュアルの作成を行ったりした。

（4）「外国人留学生在日本での勉強に専念してもらうために私たちにできることは何か」

調査の結果、来日した際、市役所での住所変更や保険の手続きに困惑することが多いということが明確になった。そこで、外国人に国民健康保険について知ってもらうなどの取組を行った。

（5）「埼玉に住む外国籍学生の義務教育後の進学に必要な対策は何か」

埼玉県国際交流協会から直接話を聴き、言語の壁によって外国籍の子供たちが大変な思いをしているという実態が分かった。

（6）「留学生が勉強しやすい環境づくり」

留学生支援を行っている立教大学国際センターで話を聴き、公共施設での言語の壁が一番の課題であることが分かった。

（7）「外国人技能実習生の現状」

外国技能実習生の就職先を仲介している団体に、現状を聴いた。

（8）「誰もが美味しく食べられる病院食を作ろう」

病院に入院している外国人患者が、宗教上の理由等で病院食を食べないことが多いと聞いた。そこで、イスラム教の人が食べられない食品を調査し、栄養面にも考慮した代替品を考案した。

（9）「在日外国人は本当に災害弱者なのか」

上記のような言葉を耳にしたことをきっかけに、実際に災害が起こった時、外国人はどうしているのか、様々な視点から考えた。

（10）「外国人を受け入れやすい病院を作ろう」

羽生総合病院と加須にほんごの会の協力を得て、病院と外国人患者、それぞれが困っている点を知ること

ができた。」IMP（外国人患者受け入れ医療機関認証制度）についても知ることができた。

（11）「外国人観光客に対する偏見をなくすためには」

川越でFWを行い、観光案内所で話を聴いたところ、普段耳にするよりは迷惑行為が少ないことを知った。

外国人観光客に対する偏見をなくす方法について自分たちの意見をまとめたスライドを作成した。

（12）「イスラムを知ろう」

羽生国際交流市民の会に話を聴き、「もしムスリムの留学生が不動岡に来たら、私たちはどう対応したらいいのだろうという」シミュレーションを行った。

埼玉県立不動岡高等学校
令和6年度
生徒研究発表会
2025/3/8 土 08:55 am ~ 12:25 pm
会場 不動岡高校
受付 08:45~11:15 退場自由
三部構成にて実施します
第一部 08:55 ~ 09:55
第二部 10:05 ~ 11:05
第三部 11:15 ~ 12:25
すべての部で校内ホール発表とブース発表を実施します
・駐車場の利用はご遠慮ください。公共施設関係者は自乗車を御利用ください。また、当該施設の駐車場への自乗車御遠慮ください。
・御参観の際は上着を御着用ください。
・会場に於いての飲食は御遠慮ください。
要予約（先着 80 名）
2/21(金) まで
埼玉県立不動岡高等学校
〒347-0013 埼玉県加須市不動岡1-1-45
学校HP <http://fudoko-h.spc.ac.jp>

【未来探究の発表会】

5 おわりに

この原稿では、外国人の人権に関する事例を取り上げたが、たとえばSDGs探究の「17の分野」には上記の他にも、「貧困をなくそう」「飢餓を0に」「すべての人に健康と福祉を」「ジェンダー平等を実現しよう」「働きがいも経済成長も」「住み続けられる街づくりを」「パートナーシップで目標を達成しよう」等、人権感覚の育成・共生社会の実現に深く関わるものが多い。それらについて探究活動に取り組むということは、表題通り、『探究活動を通じた人権教育』であると考え。また、未来探究の「地域課題研究」においても地域の老人や子供等、地域の弱者に寄り添い、共生社会を目指す探究活動が多く見られた。これもまた、『探究活動を通じた人権教育』であると考えている。

また、本校では探究活動を通じた人権教育とは別に、人権に関するビデオ視聴も行っている。

昨年度の3年生は、「憎しみはこうして激化した戦争とプロパガンダ」を視聴した。今日、人々の憎悪と分断を煽り立てるプロパガンダは、より巧妙・高度化しており、異文化との共生という点においても懸念を感じたためである。